

# 教化センター報

2024年

第39号

展開してゆけばよいのか、一仏両祖のみ教えの中から、お示しになられています。

「お釈迦さまは縁起

令和六（二〇二四）年度曹洞宗管長告諭のなかで、南澤道人管長猥下は、「今、世界が抱える諸問題は、複合的かつ重層的なものです。基本的な人権としての平和な暮らしや命の尊厳が脅かされる危機的な状況は、広がる一方と言っても過言ではありません。」と述べられ、いままさに世界に起こっている戦争の惨禍や、地球温暖化にともなう自然災害の大規模化は、私たちに生存の危機をもたらしていると感じられています。このような中で、私たち一人一人がどのような生き方を目標とすべきなのか、またこのためにどう布教



曹洞宗  
九州管区教化センター  
統監  
畑野 孝之

の理法をさとられ、一切を正しく観察される智慧と、他者との和合調和は慈悲によつて成ることを、身を以つてお示しく下さいました。」とお示しになられ、仏教の基本である縁起の理法と、さらにその教えの両輪である智慧と慈悲の重要性を説かれます。いうまでもなく、お釈迦様の出発点は、「四門出遊」の物語が示す通り、人生の苦からの解放です。その苦の原因が、自分の思い通りにならないという、自我にあることを認められ、出家後の修行として、この自我を代表する身体からの解脱を目指す苦行に励まれます。やがてこの苦行・断食を捨て山を下り、川で身を清め、村の娘スジャータが差し出す乳粥をいただき、菩提樹の下で最後の瞑想にはいられます。その深い瞑想・坐禅の中で、「縁起の理法」を悟られます。この縁起は、無限の時間のつな

がり空間的関係性の中で、今ここにありということ。一過性の時空の無限の広がりをもつこの縁起は、たとえスーパーコンピューターでも扱えない、つまり科学の領域を超えた「智慧」と言えるでしょう。一方で我々は、このような完成された智慧を得ることはできず、現実の中で、自我を滅することもできず、苦しみの中で愚かな行動を繰り返しています。いま世界で起きているもつとも愚かな戦争も、国家という自我の主張、つまり他の国を自分の思い通りにしたいという欲望のもと、それがかなわないため、怒りに任せ相手を武力によって攻撃するという戦争に走り、多くの罪のない民衆が死んでいくという結果になっています。まさに懺悔文にいう「貪（むさぼり）・瞋（いかり）・痴（おろかさ）」による連鎖の結果です。この連鎖を断ち切るのは「慈悲」です。これは、衆を与える「慈」と苦を除く「悲」をさし、いつくしみ、憐れむ心といわれます。『母が自分の子供を（守るように、それも）命がけで独り子を守るように、また、このように、

一切の生類にたいし、無量なる（慈愛の）意（こころ）を習い修めるように。『引用スッタニパータ149』と説かれています。慈父母の子供に対する慈愛はかけがいのないものです。しかし、時には偏愛となってしまうこともあります。それを一切の生類に対して、無量なる慈愛のこころを習い修めるようにと説かれています。他者との和合調和の中で、初めて自我の壁がなくなり苦を乗り越えることができるのでしよう。そこを猥下は、「我利・我欲を離れる私たちの生き方」としてお示しにされました。

次に道元禪師の「回光返照の退歩を学すべし」とのお言葉をお示しにされました。

これは、「須らく言を尋ね語を逐うの解行を休すべし。須らく回向返照の退歩を学すべし。』『普勸坐禅儀』よりのお言葉です。

道元禪師は、祖録などを否定するものではないのですが、ここでは、言葉や概念による真実の探求には限界があること、だからこそ、光を外に向ける放光で

はなく、内に向ける返照、つまり自己に光を向けて、進歩も退歩もない本来の自己とは何かを参究すべきだ、とお示しにされています。

苦の原因を他に求め我他彼此（ガタピシ）している自我に対し、その自我自体が実在するののかという空の教え（縁起の法）の中に、本来の自己を見つめ、その本来の自己の在り方としての仏の姿、つまり坐禅を行ずることの大切さ（只管打坐）を示されているのではないのでしょうか。

次に瑩山禪師の「必ず和合和睦の思いを生ずべし」との教えを示されました。

これは『洞谷記』の当山尽未来際置文に、「瑩山今生の佛法修業は檀越の信心によって成就す」またさらには「師檀和合して親しく水魚の昵をなし 来際一如にして 骨肉の思いを致すべし」という有名なお言葉が見られます。これも自他の対立を超えた、本来の自己の在り方、慈悲を示しています。

告諭は最後に、「合掌は、御仏に自らを重ね合わせることで。そして、御仏

に顧みよ、と説いておられます。

瑩山禪師は「必ず和合和睦の思いを生ずべし」と示されました。

和合調和を乱すのは、何時の世も人間の我利・我欲、すなわち貪りであり、対立闘争の根源なのです。

無常無我の世なればこそ、日月は私無く一切を照らしております。私たちも、至心に万事万縁と関わってゆきたいものです。

合掌は、御仏に自らを重ね合わせることで。そして、御仏をこの身に頂く坐禅に親しみ、世界中の人びとが誰一人取り残されることなく、安らかに暮らせるよう、祈り、念じ、共どもに菩薩行を進めてまいりましょう。菩薩の誓願に生きることが、苦悩の世を安楽の世にする真の道であります。

大本山總持寺開山太祖瑩山紹瑾禪師七〇〇回大遠忌法要をご縁として、和合

# 告諭

今、世界が抱える諸問題は、複合的かつ重層的なものです。基本的な人権としての平和な暮らしや命の尊厳が脅かされる危機的な状況は、広がる一方と言っても過言ではありません。

一仏兩祖を信奉する私たちは、確かな道を知っていなければならぬのです。

お釈迦さまは縁起の理法をさとられ、一切を正しく観察される智慧と、他者との和合調和は慈悲によって成ることを、身を以てお示しく下さいました。それは、我利・我欲を離れる私たちの生き方だったのです。

道元禪師は「回光返照の退歩を学すべし」とお示しです。

歩みを止め、息を調べ、二歩も三歩も退いて、自らが行いを仏道に照らし謙虚

をこの身に頂く坐禅に親しみ、世界中の人びとが誰一人取り残されることなく、安らかに暮らせるよう、祈り、念じ、共どもに菩薩行を進めてまいりましょう。菩薩の誓願に生きることが、苦悩の世を安楽の世にする真の道であります。」とお示しにされた、そして、「太祖瑩山紹瑾禪師七〇〇回大遠忌法要をご縁として、和合のみ心を我が心、和合のみ教えを我が行いとして、太祖さまに見えようではありませんか。」と結ばれております。

この和合のみ教え、慈悲・利他行を布教の原点として、分かち合い、支えあい、思いを重ねあつて、人と人との繋がりを深め、この困難な時代を乗り切り、その大いなる足音を次の世代に伝えていくことこそが、この大遠忌の報恩行として、求められているのではないのでしょうか。



のみ心を我が心、和合のみ教えを我が行いとして、太祖さまに見えようではありませんか。

合掌

南無釈迦牟尼仏  
南無高祖承陽大師道元禪師  
南無太祖常濟大師瑩山禪師

令和六（二〇二四）年四月一日  
曹洞宗管長 南澤道人





## 令和六年度布教化方針

曹洞宗の布教化は、人びとが一仏両祖のみ教えを実践することで、深い喜びと安らぎを得ることを願い、その実現を目指します。

本年度の布教化方針は、布教化に関する告諭の「世界中の人びとが誰一人取り残されることなく、安らかに暮らせるよう、祈り、念じ、共どもに菩薩行を進めてまいりましょう」とのお示しを受け、これまで推進してきた「禅の実践」「一仏両祖への帰依」「菩薩行の実践」と共に、「菩薩行の実践としてのSDGs（エスディー・ジーズ）への取り組み」を推進することといたします。

宗門においては長い間「人権・平和・環境」のスローガンのもと、さまざまを取り組みがなされてきました。これらは貧困や差別、環境や平和の問題を包括的に理解し、連携して取り組もうとするSDGsと、理念を共有するものです。世界中の人びととともに、次世代の「いのち」を守ることを考え、身近な生活を振

り取り自分が出来ることに取り組んでまいります。

以上の取り組みと同じく、令和六年能登半島地震への対応と支援、東日本大震災及び原発事故など多発する災害の被災地支援と自死問題への対応、部落差別をはじめとするあらゆる差別の根絶、人権の確立、平和な世界の実現、地球環境の保全などの取り組みも引き続き進めてまいります。

現代社会では、宗教のありかたが根底から問われています。今次内局が定めた「人びとの声に、心耳を澄まし、社会とともに歩む」の基本姿勢に表されるように、いまこそ、私たちは我が心を振り返り、人びとに歩み寄り、小さな声、声なき声に耳を澄ませて、社会とともに歩んでまいります。

その基軸となる指針として、以下の項目を定めます。

### 一、禅の実践をすすめます。

私たちは、寺院の内外を問わず、さまざまな機会において坐禅の実践をすすめ

ます。より多くの方が坐禅に親しめるよう、いす坐禅をはじめ、インターネットを活用した坐禅会や動画の配信等を通して、坐禅の普及につとめます。不安で落ち着かない社会の中にあっても、身と息と心を調える坐禅を中心とした「禅の生き方の実践」が、智慧と慈悲を育み、確かな人生の基軸となることを人びとに伝えひろめます。

### 二、一仏両祖を敬い、おとなえの普及につとめます。

私たちは、日々「南無釈迦牟尼仏」「南無高祖承陽大師道元禪師」「南無太常済大師瑩山禪師」とおとなえし、そのみ教えを学び、日々の行いに生かしていくことの大切さを伝えていきます。

### 三、『修証義』『四大綱領』に基づく菩薩行の実践をすすめます。

私たちは、宗門の教義である『修証義』『四大綱領』に基づき、布施・愛語・利行・同事の四摂法に代表される菩薩行の実践をすすめます。世界中の人びとの幸

せと安寧を願う行動することが、自らを菩薩として成長させる大切な修行になること、更にはそれらが自らの深い喜びと安心につながることを伝えていきます。

### 四、人と人とのつながりを大切にして、全ての人が救われる関係づくりを目指します。

私たちは、寺院を場とした教化活動にとどまらず、積極的に地域社会に働きかけることで、人びとの悲しみや苦悩に学び、寄り添い、支え合い、分断のない、心が通う温かな関係を築けるようつとめます。また、仏事が簡略化されがちな世情の中で、改めて、人と人との生き死にを超えたつながりの大切さを伝え、出来る限りのご供養が営めるよう力を尽くします。

※SDGs (Sustainable Development Goals) は「持続可能な開発目標」と訳され、二〇一五年の国連サミットで加盟一九三カ国の全会一致で採択された「貧困や飢餓の解消」「平和的社会的実現」などに関連する十七の課題を、統合的・包括的に解決していくこととする国際目標です。

## 教化指導員研修会～平戸を歩いて～

令和6年6月4日から2日間、太陽が燦々と降り注ぐ爽やかな好天の中、九州管区教化指導員研修会が長崎県平戸市にて開催されました。数日間コロナ禍により中止されていた本研修会も、昨年の大分県研修会に引き続き本年も開催され、とても実りある時間を過ごすことができました。

2日間の研修内容は主に、日本初の貿易の地である平戸市街地と、潜伏・隠れキリシタンの歴史、捕鯨産業文化が残る生月島の史跡や史料・博物館のフィールドワークでした。

初日13時からオリエンテーションと共にスタートした今回の研修会では、まず始めに平戸市文化交流課の前田秀人先生による「郷土の歴史を学ぶ」と題した講義を受けました。平戸市内の歴史である潜伏キリシタンを始め、日本で最初に始まったヨーロッパを中心とする諸外国との貿易、今からちょうど300年前に開始した捕鯨産業など、約50分にわたる内容を受講します。前田先生は「その土地に歴史があるか否かは、その土地にどれほど多くの資料や書籍が残されているかだ」と話されていました。実際にその後の市街地探索では博物館や史料館、史跡の多さに圧倒されました。

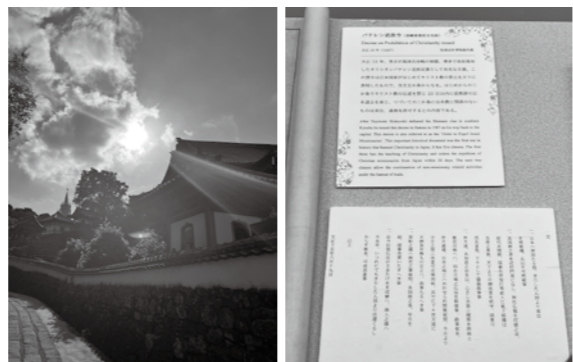
西洋風に建築されたオランダ商館、日蘭親交記念碑、豊臣秀吉が出したバテレン追放令の原文を見ることができる松浦史料博物館（旧平戸城主松浦隆信邸）などを見学しました。中でも寺院（瑞雲寺）と教会（ザビエル記念教会）が並んで佇む風景は、他に類を見ない、その土地柄を表す異国情緒を物語っています。

2日目は、平戸市街地から車で30分ほど移動して生月島にある博物館「島の館」にて研修を行いました。館長である中園成夫先生に「潜伏・隠れキリシタンの歴史」と題し、当時の宣教師の渡来、人々の信仰の様子、なぜ宣教師が追放されキリシタン信

者は死罪や改宗を迫られたのかについて学びました。館内の資料と中園先生による座学を通して、私が最も不本意に感じたことは、時代や考え方は現代と違えど、信者の方々がそれまで行なっていた信仰や心の拠りどころ、安寧を奪われてしまい、宣教師不在で路頭に迷いながらも密かに信仰をし続けた信者の心痛であることです。そのような過去を持つ彼らの心の痛みを、僧侶である私たちは特に知っておくべきだと感じました。

この2日間の研修を通して、日本初の貿易の地であり一時は大いに繁栄した平戸は、実は悲しい歴史も背景に持つ地であることを学びました。私たち宗門僧侶が掲げるスローガンの「ともに願い、ともに寄り添い、ともに歩む」という誓願を今一度発心する研修でもありました。また、本宗も推進するSDGsの「誰一人取り残すことのない」最も脆弱な立場の人々に、不平等をなくす取り組みが必要だと感じる研修会になりました。

今般の研修会のために御尽力いただいた九州管区教化センター、並びに長崎県第1宗務所の皆様ありがとうございました。





# 瑩山禪師七百回大遠忌に思う

宗像市 建興禪院 毛井龍浩

本年は瑩山禪師七百回大遠忌の年である。神奈川県鶴見の大本山總持寺では盛大に法要がお勤めされている。

法要の意義は瑩山禪師はじめ道元禪師、また古佛の悦ばれる行持の実践にあると思う。その根幹は坐禅だ。

自坊である（曹洞宗認可参禅道場）建興禪院では日曜参禅会で瑩山禪師「坐禅用心記」を輪読している。

約一年かけてまもなく二回目を読み終える。

道元禪師の「普勧坐禅儀」をより詳しく解説されており毎回感動している。

私は高祖道元禪師七百五十回大遠忌の時に大本山永平寺で二年間修行させて頂いた。

大遠忌で忙しく大変であったが同安居にも恵まれ素晴らしい経験が出来た。

建興禪院に戻って副住職になったが坐禅、修行について納得出来ず、縁あつて

板橋興宗禪師様の下、福井県越前市瑩山禪師御誕生寺にて三年間修行させて頂いた。

禪師様と四六時中行履し、共に坐禅をできたことは最高に幸福であった。

最近一番思い出されるのは度々一緒にさせていただいた石川県能登半島のことである。

今年の元日に能登半島が地震で甚大な被害を受けた。

現在も地震が続き解体作業すら進んでいない現状で心が痛み言葉が出ない。

禪師様は北陸の地に加賀大乘寺、能登總持寺等の元住職地が多くあり思い入れが強かった。

その中でも特に、地震被害の能登を本当にこよなく愛しておられた。

能登の美しい自然。その自然に育まれた文化、人情、田舎っぽさという日本の宝。金や物では決して得ることができな

い素晴らしさを力説されていた。

「自分が死んだら骨の主要部分は能登に持つて行ってくれ」と何度もお聞きした。

他には瑩山禪師の聖地である越前大野の宝慶寺、能登羽咋の永光寺に憧れを抱いておられ、どちらも過疎地域であることを心配され、

「宗門の根本坐禅道場にすべきだ」

「約百年前に神奈川県鶴見に移した本山をいっそのこと能登に戻したらどうか」ともおっしゃられていた。それほどにも愛し、いつも気にかけておられた。

実際に道元禪師は永平寺、寂圓禪師は宝慶寺、瑩山禪師は永光寺、總持寺祖院、大智禪師は聖護寺、興宗禪師は御誕生寺と真実の人は皆、金や物があふれている都会から離れ大自然に身を置き坐禅修行に打ち込まれた。

宝慶寺は人里離れた山奥の豪雪地帯で孤立無援の修行の寺である。古仏の凄さに只只頭が下がる。だが、永平寺が大火等で荒廃した時その法燈を護りつないだのは宝慶寺である。そのおかげで今の御本山がある。それを決して忘れてはなら

ない。

現在、本山同安居が役寮として雲水と共に坐禅修行し護っている。

それは私にとって心からの喜びで、誇りであり、また大きな励みだ。

瑩山禪師について、謎は多いが越前に生まれ懐装禪師について得度、宝慶寺で寂圓禪師の下修行、加賀大乘寺で義介禪師の法を継ぎ徳島県阿波城満寺を開山、そして能登五老峯永光寺、總持寺で祖師の法燈を相承された。それが五老峯であり傳燈院である。

五老峯とは天童如浄の語録、永平道元の霊骨、弧雲懐装の血経、徹通義介と瑩山紹瑾の嗣書という五禪師の象徴を収め埋葬された墳丘である。これを起源として曹洞宗が形成された。私たちは五老峯を崇拜しなければ話にならない。

「第三の本山」といわれた奥州正法寺は、大本山總持寺二祖峨山韶碩禪師の高弟無底良韶禪師によって開かれた。無底禪師は能登国の出身である。曹洞宗の原点は紛れもなく能登である。能登が無ければ我が宗門はないのは事

実。まさに起源であり根幹の地。「坐禅用心記」も能登永光寺でお示しくくださった。

この瑩山禪師七百回大遠忌という勝縁を期にその足跡を今一度見直し、その教えに立ち帰り大自然と一つの坐禅の生き方を実践することが瑩山禪師の本懐であり大遠忌の意義では無かろうか。個人のみではこれはどうにもならない。

宗門の一端である我らは今こそ一味同心、大衆の大威神力によって復興を成し遂げなければならない。

それこそが禪師様方、諸仏の誓願であろう。

能登のおかげで今の私たちがいる。その復興が坐禅の道。

能登が復興を成し遂げ、坐禅実践の聖地となることを、至心に祈る。至心に祈る。

## 教化センター布教協議会

曹洞宗九州管区教化センター布教協議会を令和6年5月16日に福岡市の会議室にて行われました。

協議会では布教教化方針に基づく布教への取り組みと、センター事業「やさしい禅に親しむ会」、「テレホン法話」への協力が確認されました。

「やさしい禅に親しむ会」は毎月1回、福岡市を会場に、いす坐禅とセンター布教師による法話を広く一般の方への布教教化の一環として行っています。

「テレホン法話」は月2回更新し、センター布教師の推薦により九州管内の若手僧侶の法話を聞くことができます。詳しくは曹洞宗九州管区教化センターのホームページをご確認ください。→ <https://soto-q.net/>

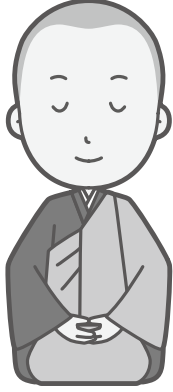
## 教化活動企画・推進委員会

本年度の教化活動企画委員会（4月15日）並びに教化活動推進委員会（4月25日）を福岡市の会議室にて開催いたしました。会議では令和5年度の事業報告、令和6年度前期の事業計画案並びにやさしい禅に親しむ会（毎月開催）、教化指導員研修会（6月4日～5日 長崎県）、禅をきく会（11月19日 福岡市）、布教講習会（2月4日～5日 長崎県）の日程について話し合いが行われました。

## やさしい禅に親しむ会

やさしい禅に親しむ会では曹洞宗九州管区教化センター布教師と管区内の布教師の皆様にご法話をいただいております。是非ともご参加いただけますようお願い申し上げます。

令和6年度 やさしい禅に親しむ会			
6月	20日	熊本県 観音寺住職	池田智道師
7月	25日	熊本県 観音院副住職	上田英生師
8月	22日	大分県 崇禅寺住職	甲斐之彦師
9月	26日	宮崎県 慈眼寺副住職	久我一晋師
10月	24日	福岡県 建興院前住職	毛井晶紀師
11月	19日	禅をきく会 東北福祉大学学長 千葉公慈老師	
12月	19日	佐賀県 長栄寺住職	壽山俊道師
1月	23日	長崎県 大雄寺住職	福田智徳師
2月	20日	未定	
3月			
4月		福岡県 建興院住職	毛井竜浩師
5月	未定		



## 令和六年度禅をきく会

令和六年度『第一回禅をきく会』は左記の通り東北福祉大学学長宝林寺住職千葉公慈老師をお迎えして演題『仏教のいま、これから』をテーマにご講演いただきます。

たくさんのご来場をお待ちしております。

また、『第二回禅をきく会』は、令和七年二月にホームページにて配信を予定しております。

### 記

【令和六年度禅をきく会】

令和六年十一月十九日 十四時開演

於 福岡市博多区吉塚本町9-15

福岡県中小企業振興センター

二階ホール

入場無料

定員600名

【講師】 千葉公慈老師

(東北福祉大学学長 千葉県宝林寺住職)

【坐禅指導】 毛井竜浩師

(教化センター布教師 福岡県建興院住職)

## 行事予定

■後期教化活動企画委員会

令和六年十一月二十日

於 福岡市

■後期教化活動推進委員会

未定

於 福岡市

■布教講習会

令和七年二月四日～五日

会場 長崎県

参加費 未定

講師 未定



九州管区教化センター  
ホームページ



<https://soto-q.net/>

令和6年

曹洞宗九州管区教化センター報

発行責任者 畑野 孝之  
発行者 菅原 宗玄

事務所 〒812-0041  
福岡市博多区吉塚 3-8-52 明光寺内  
TEL 092-611-2166  
FAX 092-612-3648  
e-mail: info@soto-q.net  
URL <https://soto-q.net>

- ◎土曜・日曜・祝祭日は休務。
- ◎彼岸入りから中日まで休務。
- ◎平日は午前10時から午後4時迄。  
か業務取扱。基本的に宗務庁の事務に準じます。